

第6章 まとめと今後の課題

第1節 調査結果の総括

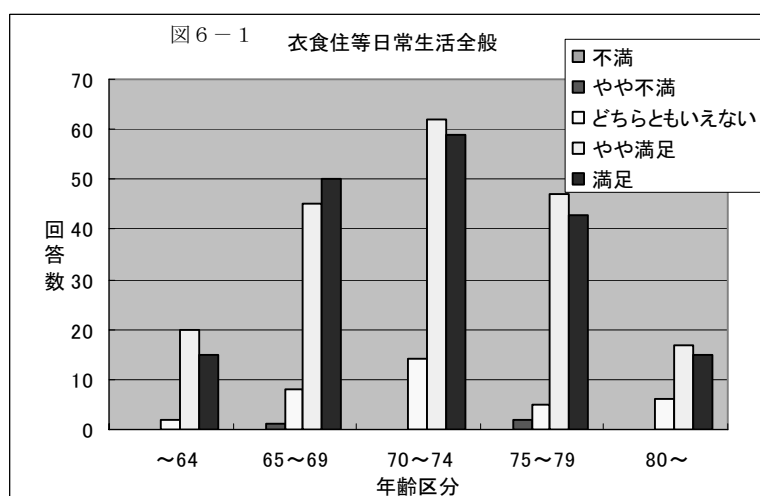
本節では、調査全体を俯瞰して、今回の調査結果を踏まえて今日の地域社会がかかえる問題解決に取り組む、基本的な視点、手がかりを得たいと思う。2～5章で特徴が述べられている諸結果をピックアップしつつ、生涯学習における学習成果の活用や地域課題への取組についての一般的な議論とのつながりなどについて、要点を述べる。

1 調査結果の全般的特徴

今回の調査は、SKYセンターに会員登録されている、平成15年度以降のSKY大学修了生を対象に行ったため、対象者の平均年齢72.12歳は、年度ごとの受講生よりやや高くなっていると思われる。それでも、次節にも述べるように、受講生の平均年齢は、徐々に高くなる傾向にある。

また、男女比では、およそ6:4の比率で男性が多いのが、市町村や大学が主催する一般の公開講座などと異なる特徴となっている。また、受講動機でも、「楽しみ・生きがいづくり」「交友関係の拡大」などが高齢者の学習動機としては一般に多い状況に比して、SKY大学では「興味・関心の充足」の比率が最も高く、SKY大学の魅力として自由記述でみられる内容にも、「講座の専門性」「レベルの高さ」があげられている点も注目される。

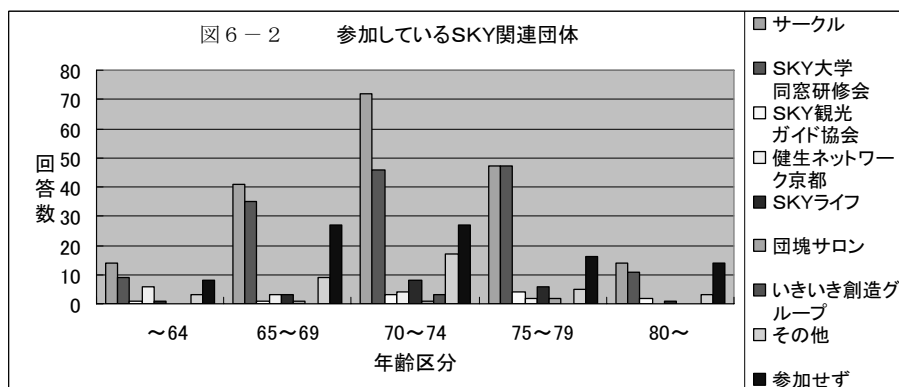
今回の回答者の健康状態が概ね良好で、日常生活の満足度も高い(約90%が「やや満足」「満足」と回答)ことに示されるように、本調査の結果は、概ね安定した生活条件に恵まれた層の回答によるものである点は注意を要する。しかし同時に、学習成果を地域活動に活かしていくということを考える場合、今回の回答者層がその可能性を潜在的にもっており、受講を契機とした地域活動参加の促進や、受講生層の拡大のための広報の工夫といった課題もみえている。



回答者のうち、SKYセンターのサークルに参加している割合が、40～50%みられる一方、地域組織(町内会・自治会・老人クラブなど)での活動状況をみると、代表・役員などを務めるケースは、4割前後あるものの、日常的に活動している割合は、14%と低い。4割あまりの「行事参加

程度」という状況から、日常生活での生きがい・楽しみづくり、生活上の安心感につないでいくような取組の必要性がみえている。回答者の7割弱が京都市内在住者であり、市外でも南部が6割を占めている状況も、地域組織よりも、サークルなど“同好の士”が集うという大都市に共通して見られる傾向を全体に示している。この“同好の士”を、大都市であっても、身近な地域で暮らしに密着した課題に取り組む活動へと導いていくことが課題となる。

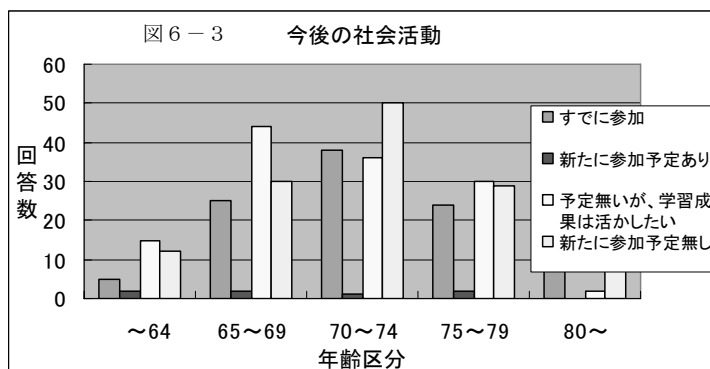
より高齢になるにつれて、日常の活動範囲は狭くなり、近隣社会がもつ意味が大きくなる。また、今日の社会問題の解決の上でも、近隣社会における住民相互の関係づくり(ソーシャル・キャピタルの醸成)が一つの鍵となっていることもこのことと関連している。



2 学習成果の社会還元

(1) 学習内容を活かす

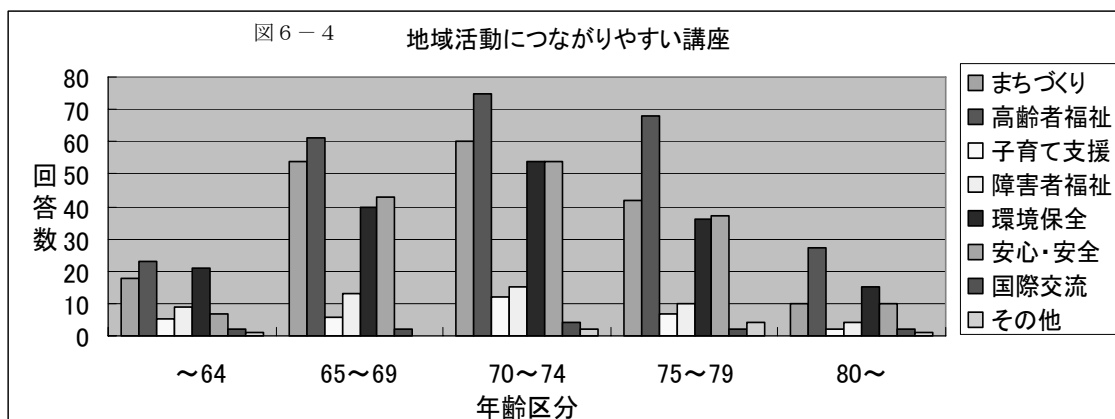
今回の調査結果からも、学習成果を活かしたいという一般的要求は強いことが示されていた。学習成果という場合、まず、文学歴史の学習をもとに京都観光ガイドの活動を始める、環境問題の学習をもとに、地域の環境保全活動に取り組むとい



った、学習内容の直接的な活用も考えられる。高齢者福祉についての学習もそのような性格のものと考えられる。

そのほかに、地域活動につながりやすい学習テーマとして、まちづくりがあげられる(図6-4参照)。まちづくりということばは、地域活動のわかりやすいイメージとなっているが、その意味するところは、広範囲にわたり、曖昧である。地域の自然的・文化・歴史的資源の発見・発掘や、産業振興の方策、環境整備など多様な課題がある。同時に、まちを“つくる”要素に着目したとき、住民が自分たちの暮らす地域の実態を見つめ、そこにある問題を発見し、その解決方策を探るという一連のプロセスにおいて、地域に客観的に存在している問題を、自分たち自身の

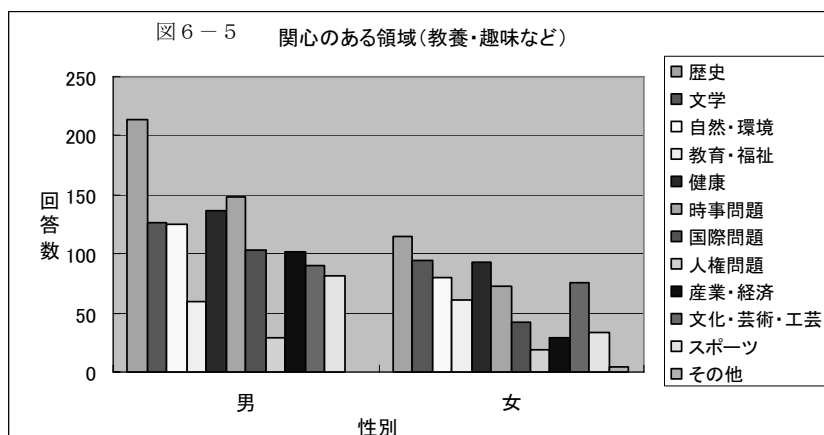
問題として意識し、それに取り組もうとする主体的意識づくりが不可欠である。行政によるたんなる啓発や誘導では、この主体的意識づくりは難しい。その前提・土台として、具体的な経験や議論を通した、問題認識の共有が必要であるし、共有を可能にする住民同士の“交わり”の世界が必要である。この“交わり”をつくりだすきっかけとして、あるいは、“交わり”を媒介する内容として、趣味・教養の活動が意味をもってくる。ともかく、顔を合わせ、会話を交わす場、機会がなければ、何も始まらないし、そもそも活動へのエネルギー、動機が得られない。



地域活動につながりやすい講座の選択肢にはないが、SKY大学に関するテーマで関心のある領域(教養・趣味など)で回答の多かった、健康がある。

健康は、食や労働など個人の生活習慣に関わるテーマであると同時に、社会の高齢化や、食生活のあり方など、集団的な学習のテーマとしても有効なものである。長野県南部の松川町では、既に30年に及ぶ健康学習の蓄積があり、同町内には、延べ200を超える学習グループの活動がある。その成果はいわゆる生活習慣病で亡くなる住民の比率が他町村に比べて少ないという実績に現れているが、この取組をすすめてきた中心である松下拓氏は、健康学習は、自分自身の身体に起こる変化への気づきから始まる、もっとも“身近”なテーマであり、「生涯学習の典型」といえると述べている。同町では、健康診断のデータをもとに、保健師・栄養士の援助の下で、集団的学習が継続されてきている。そのような形をそのままね

ることはできないとしても、他のテーマ・領域とは異なる発展性をもった内容として、SKY大学での講座展開に、この健康というテーマを位置づけていくことがあってもいいのではないだろうか。



平成20年4月から始まった特定健康診査制度が今後成果をあげていくためにも、健康をテーマとした学習の新たな展開が求められている。

(2)学習活動の組織方法の工夫

調査結果を見ると、講座を通じて、友人関係の広がりや女性を中心にみられるが、生活点・身近な地域での関係づくりや活動参加との間には一定の距離がある。地域組織のほうに、活動への新規参入者を寄せつけにくい壁があるように思われる。それは、地域組織のそれぞれにすでに出来上がっている人間関係や、活動スタイルである。ボランティアグループのような、志で結ばれる集団にあっても、一旦形成された集団は、活動を通じて、そのメンバー間の理解を深め、能力を相互に形成していく。ひとりの新しいメンバーが加わることによって、既に形成されていたメンバー相互、その全体の構造が変容を受けることになる。あるいは、全体の構造を変えることで、新メンバーの居場所や役割を確保するという、グループ活動としては、かなり高度な意識的再編が求められる。それよりは、同種の活動であっても、新たなグループをつくっていくほうが、活動当事者の負担も少なく、活動に加わる住民全体の層を広げることにもつながりやすい。地域組織は、網羅的に形成され、ピラミッド的な組織構造をもったものとして作られてきた歴史が厚く、ボランティアグループのような比較的新しい組織であっても、そのような傾向がある。法人格をもった NPO の活動なども含め、これからの地域社会における住民の活動総体を育てていくためには、このような地域組織の性格を踏まえつつ、新たな時代状況に呼応していく、柔軟で多様性をもった仕組みが求められている。SKY センターで現在構想されている「ナイスシニア・ネット」(1章調査の目的、及び本章第2節で紹介)のような、地域活動に関する情報収集・提供と活動参加へのサポート機能を備えた仕組みの必要性も、このような流れの中に位置づけられよう。

3 調査の結果から考える SKY センター・大学の存在の意義

調査の目的は、SKY 大学での学習成果を修了生の社会活動への参加に結び付けていくための手がかりを得ること、SKY 大学が掲げている「仲間づくり」「生きがいづくり」「健康づくり」「リーダーづくり」という目的にかなった今後の講座展開の手がかりを得ることにあつた。

いわば、時代のニーズと受講生のニーズの双方にマッチする講座展開、SKY センター全体の事業展開の方策を探ることが課題となっていたのである。

学習成果を活かしたいという意欲の高さと、地域活動への橋渡しには、独自の取組が必要という課題が鮮明になったことは、前者の目的にかなった結果が得られたものと判断できる。

今後の講座展開の方向性については、新たなテーマや分野設定、講師と受講生、受講生相互のコミュニケーションを図るなど運営方法の工夫といった課題が明らかになっている。

第5章で、地域活動全般への意見(自由記述)にもとづいた考察をおこなったが、今回の調

査結果の特徴の一つに、自由記述項目への熱心な回答が挙げられる。SKY 大学、SKYセンターへの要望についても、次節で詳述するように、多くの声が寄せられている。これらの声に表されている、“シニア世代”のエネルギー、潜在的な力を現実化していくことが SKY センターに課せられた基本的な課題である。

今日、増加する高齢者層をターゲットにして、新たな市場を開拓しようとする動きが活発である。医療・保健、福祉の分野も例外ではない。生涯学習分野は、すでに民間のカルチャースクールなどの事業に見られるように、一つのマーケットとして形成されてきている。また、大学の公開講座、市町村が提供する住民向け各種講座・教室など、学習サービスの提供主体も多様に存在している。そのような中で、SKY センターがその存在意義をどこに見出していくかが問われている。

SKY 大学がもっている講座の専門性・レベルの高さ、受講生の学習関心の強さなどの特徴を活かしつつ、潜在力の高い受講生・修了生層をもつという条件を活かして、地域活動への展開というかたちでセンター・大学の機能を高めていくなれば、新しい時代状況のもとでの、その意義は、一層高まっていくものと、今回の調査結果全体が教えてくれているのではないだろうか。

第2節 今後の新・京都SKY大学のあり方

1 新・京都SKY大学がかかえる課題

(1) SKY大学受講と地域活動への参加

○身近な地域(地縁)組織は地域活動への入り口

第4章でも述べたように、身近な地域(地縁)組織である町内会・自治会活動への参加状況を聞いたところ、既に 73%が参加しており、うち37%は代表・役員等を務めていることが明らかとなった。また、SKY大学受講との関連をみると、受講前から参加している人の割合は 65%となっており、町内会・自治会での活動は、SKY大学受講生にとって身近な社会活動となっているものといえる。一方、地域の老人クラブへの参加率は 27%と低く、特に、74 歳以下では約8割が不参加となっている。

しかし、このような身近な地域(地縁)組織での活動の満足度を聞いたところ、「満足・やや満足」が 39%となっているが、45%が「どちらとも言えない」と答えており、約半数の人は、このような地域(地縁)組織での活動では、いま一つ、充実感を味わえていないようである。

地域(地縁)組織での活動は、自分の住んでいる地域のことでもあり、相互扶助が原点

であることを考えれば、「機会があれば活動に参加したい」と思っている人も多く、誰もが気軽に参加できる「場」づくりが課題といえる。

○趣味のサークルや有志グループの活動から社会活動へ

受講生のうちには、既に趣味のサークルや有志グループに参加している人が多く、さらに地域へと活動の幅を広げられるよう関心を促す工夫が必要である。

そのためには、高齢者の関心を惹く情報の提供やサポート体制を整える必要があり、特色のある活動事例や活動実践者の体験談を紹介する冊子を作成するなど、ビギナーが安心して参加できる気運を盛り上げる取組が必要である。

さらに、SKY大学で紹介した「土の塾」や「モデルフォレスト」等の活動団体と連携してインターンシップの受け入れを働きかけるなど、実際の体験を通じて活動参加への「後押し」を促すことも有効な手段と考えられる。

○初心者が参加しやすい雰囲気づくり

アンケートの意見にもあるように、地域組織の場合には人間関係が複雑で、初心者が入りにくい雰囲気がある。むしろ、そのような煩わしさが少ない、ボランティア組織の方が一般的には参加しやすいといわれており、その際、友人からの誘いや配偶者の「後押し」があると、最初の一步を踏み出しやすくなるものである。

既に社会活動に参加している人は、約9割が健康状態は「良好・概ね良好」と回答しており、やはり何をするにも健康が基本である。従って、まずは、健康学習の一環としてスポーツを通じて健康な身体をつくり、その上で地域活動へ入っていくことも考えられ、SKYセンターのサークルネット(スポーツ系・文化系の全サークルの連絡組織)と連携し、初心者が参加しやすい雰囲気づくりを行うことも効果的と思われる。

(2) SKY大学の魅力をどう高めるか

○社会活動への関心を促す工夫(「きっかけ」づくり)

SKY大学における社会活動に関するテーマで関心のある分野を聞いたところ、60歳代は、「高齢者福祉」「環境保全」「まちづくり」に、70歳代以降は、「高齢者福祉」「環境保全」「安心・安全」に対する関心度が高い傾向があり、社会活動に関連するカリキュラムの編成に当たっては、これらをバランス良く配置することが肝要である。

さらに、社会活動への関心をより深める手段として、特色のある活動を行っている事例紹介や実践者による講義、インターンシップ等による実際の活動体験が効果的と考えられる。また、SKY大学での学習成果を地域活動に繋いでいくためには、希望者を対象とした短期講座として、地域活動についてのノウハウを学べる講座や、グループの運営方

法についての実践講座等の開設も考えられる。

○友人関係をつくりやすい雰囲気づくり

座学だけではなく、受講生自身による自主企画や、実際のボランティア活動への体験入門、研修旅行等を組み込むことによって、受講生同士の交流が深まり、友人関係を築きやすい雰囲気が自然と形成できると考えられる。

○SKY大学の魅力を広くアピール

SKY大学の存在が、まだ、府民に十分に認知されているとはいえない実態があるように思える。今回のアンケートでも、「SKY大学を何で知ったか」を聞くと、「友人・知人から」が45%と最も多く、その次が「行政広報」となっている。「新聞・ラジオ等」のマスコミを通じたものは6%と極めて低い。これは、広告費等の予算的な制約からやむを得ない面もあるが、新規の受講生の募集に当たっては、行政広報の最大限の活用はもとより、なお一層の工夫が必要である。

次に、受講生の平均年齢が徐々に高まってきている点である。平成19年度の受講生の平均年齢は70.1歳となっており、5年前の15年度は68.7歳である。今後、団塊世代が65歳に到達する平成24～26年には、65歳以上の高齢者が、全国で年に約100万人づつ増加すると予測されている中で、この世代をどう取り込むかは重要な課題である。官公庁、企業等の退職予定者や退職後1～2年が経過したシニア層への重点的な働きかけが重要と考えられ、その際、次に述べる「魅力ある講座内容」とすることは必須の条件となる。

○魅力ある講座内容

講座内容の基本は、受講生の健康増進、知的好奇心や教養を高めることをベースに据えながらも、その上で、仲間をつくり、学んだことを活かして自分の住んでいる地域社会との関わりを考え主体的に行動する、そういうアクティブシニアを養成することを目的とした受講コースの設定やカリキュラム内容とする必要がある。

また、「民間のカルチャーに比べてマンネリ化している」「専門性が薄く一般的」等の意見にもあるように、共通教養講座の満足度（「満足・やや満足」合わせて64%）が、他のコースの満足度（同75～95%）に比べて低くなっており、講座内容の見直しに当たっては、この点も踏まえた検討が必要である。例えば、健康問題、高齢者問題、ボランティア活動等は必須科目としつつも、時の話題となったテーマについての特別講義や京都の歴史・文化に因んだ講義、高齢者が歩んできた時代を振り返る「心」をテーマとした講義等、受講生の要望もよく踏まえたカリキュラム編成について検討すべきである。

2 新・京都SKY大学の今後のあり方

○知識・教養充足型から、プラス社会活動参加型へ

先に述べたように、現在のSKY大学の各コースについては、満足度はかなり高いといえる(『資格取得準備コース』は、19年度で廃止)。特に、『京都見聞コース』や『総合活動Bコース』(北部地域)は、90%を超える受講生が「満足・やや満足」と回答している。しかし一方で、共通教養講座の満足度が低いことや、以前に比べて「コース選択の幅が小さくなっている」「専門性が低下している」「時事問題についての講義が少ない」「工芸体験の専門コースを設けて欲しい」等、新・京都SKY大学となる平成15年までと比べて、現在は魅力が低下しているとして問題を指摘する意見も多い。

その他にも、「大学の先生以外にも技能者や社会的に活躍している人を講師に」「講師との双方向のコミュニケーション」「受講生同士の交流機会のきっかけづくり」「身体の不自由な人への配慮」等、大学運営上の問題について指摘する意見もある。

ボランティア・社会活動に関しては、「地域社会に貢献したい人はたくさんいるはず」「ボランティアとして参加できるものがあれば是非参加したい」「地域活動に参加しやすい事例紹介と学んだことを活かせる「場」づくり」等、積極的で前向きな意見が多く、社会活動等への関心の高さをうかがわせる。

このような意見を踏まえた、これからのSKY大学のあり方としては、「地域の指導者として活動できるリーダーづくり」を目的としつつも、これまでのややもすると「個々人の興味・関心の充足」に偏りがちな大学運営から、さらに加えて「社会活動を通じた仲間づくり・生きがいがづくり」に無理なくステップアップできるようサポートする地域とともに歩む高齢者大学として機能を果たしていく必要がある。

以上のような考え方にに基づき、今後のSKY大学のあり方の基本的な方向を定めるとすれば、「リーダーづくり」を目標に据えつつも、その具体的プロセスとしては、受講生に「活動のきっかけ」となる情報や体験学習の機会を提供し、活動を促すことによって「仲間づくり」「健康づくり」「生きがいがづくり」に繋げ、さらに、よりアクティブに地域への貢献を目指す者には、社会活動に必要な知識・スキル等を学べる学習機会を提供することである。

地域の指導者として活動できる人材(リーダー)については、このような学習プロセスを経て育成することが可能と考えられ、SKY大学がその役割を担うこととなる。

○社会活動への参加を支援するシステムの整備

今回のアンケートで「社会活動への参加状況」を聞いたところ、地域(地縁)組織では、SKY大学受講後に参加した人の割合が、「趣味のサークル」を除き10%程度と低くなっている。しかし今後の予定を聞いたところ、SKY大学受講の成果を活かした活動がしたい人は34%にもなっており、特に60歳代は44%と高く次いで70歳代の人にこの傾向が強い。

また、関心の高い分野として、「高齢者福祉」「まちづくり」「環境保全」「安心・安全」がまんべんなく挙げられており、特に75歳以上は、「高齢者福祉」が突出している。

このようなことから、SKY大学受講生や修了生がスムーズに各自が関心を持つ社会活動へ参加できるよう誘導するためのトータルサポート機能を持ったシステムの整備が必要である。現在、SKYセンターでは、この役割を担う仕組みとして「ナイスシニア・ネット支援システム」について検討しており、これまでの試行結果を踏まえて、21年度中には本格的なシステムを構築する予定であるが、基本的には、次の2つの機能で構成されている。一つは、社会活動に関連する情報の収集・提供を行うポータルサイト機能と、もう一つは、SKYセンターの行う既存事業や活動グループの合目的な組合せによるナイスシニア支援機能で構成されており、特にSKY大学は、ナイスシニア支援機能のうちの中核を担う重要な事業と位置づけている。

○京都SKYセンターの活動を広く府民へ広報

京都SKYセンターのこのような取組が、広く府民に浸透していくためには、何よりも広報が重要である。SKYセンターには、既に、SKY大学、同窓研修会、サークルネット、観光ガイド協会、団塊サロン等の活動グループがあり、それぞれの特色を活かした独自の取組がなされている。また、SKYの名を冠したボランティア活動のグループが立ち上がりつつあり、このような活動の魅力や楽しさを積極的にアピールすることで大きな効果が期待される。

SKY大学は、このような既存の事業や活動グループを活用した複合的な取組と有機的に連携し、府民に開かれた、そして地域社会との関わりを主体的に求めるアクティブな高齢者の生きがいづくりの拠点となるシニア大学を目指して新たなステップを踏み出していく必要がある、そのためには、京都府をはじめとする行政機関との一層の連携が不可欠である。